

第 37 回土木計画学研究発表会(春大会)：2008.6.6~7(北海道大学)

スペシャルセッション討議内容の記録

セッション名：SS 12 国際交通流動の分析・モデル化と政策シミュレーション	
日付： 6月 7日 (土)曜日，セッション時間： 14:45～17:15	
オーガナイザー名(所属)：竹林幹雄(神戸大学)	
討 議 内 容	<p>本セッションでは、複雑化・高度化する国際貨客輸送市場ならびにそれに関係する国際インフラの整備・運営に供するための需要分析手法に関して、新たなモデル構成論を紹介するとともにデータ収集・分析に関する話題提供を行った。そして提供されるモデルの特性や政策シミュレーションの結果についての討議が行われた。以下に主な討議内容を要約する。</p> <p>(1) 国際交通流動の分析手法の流れ概観 竹林幹雄(神戸大学) 近年の国際化客輸送に関わる分析手法を、伝統的分析手法としてのトレンド分析をはじめとして、荷主・旅客の経路選択行動分析、キャリアの輸送経路設定、キャリア-ユーザの相互関連モデルという分類で紹介を行った。</p> <p>(2) わが国における国際航空旅客の現状について 大井輝夫(パシフィックコンサルタンツ(株)) 国際航空旅客動態調査データ等を用いて、旅客の出入状況の変遷、ならびに日本発着旅客の海外でのトランジットの状況の変遷について検討した。仁川空港開港当初は、わが国からのダイレクト旅客への影響が懸念されたが、地方空港に関しては現在、全体の1割程度の影響にとどまっていることが指摘された。また、討議では仁川での乗り継ぎが少ない原因についての質問があり、地方空港からのアクセスが悪く、欧州便への乗り継ぎが不可能であることが紹介された。</p> <p>(3) 港湾政策評価のための国際海上コンテナ貨物の広域シミュレーションモデル 柴崎隆一(国土技術政策総合研究所) 国際コンテナ貨物輸送市場を対象とした、キャリア(船社)-ユーザ(荷主)の相互関連モデルを開発し、アジア内の海運ネットワークを詳細化した適用例を紹介した。また、開発されたモデルをASEANでの港湾整備、道路整備インパクトを計測した結果、それぞれ単独に行った場合では効果が負となる地域が出るものの、全部を行えば全ての地域で効果が正となることが報告された。</p> <p>(4) コンテナ運用に着目したコンテナ船の航路ネットワーク分析 新谷浩一(大島商船高専) アジア船社と欧州船社とのネットワーク構成(メガシップによるハブ・スポーク or 従来船によるマルチポートコール)の選択を戦略とした競争市場を考察し、均衡解では欧州航路でHS、太平洋航路でMPCとなり、ともに対称な戦略をとることが最適となり、コストの非対称性が強くなるとアジア船社からMPCになることが示された。</p> <p>全体としては、モデルの操作性を高めることに重点を置かれているが、実用に対してはモデルそれぞれに得意・不得意な部分があるので、モデルをモジュール化して継ぎ足すようなことは難しいことが指摘された。また、あくまでも近似解を求める方法論と、理論から厳密に実証に適用することを目的とした方法論に大別されるが、後者は適用できる問題の規模を拡大するため、より効率のよいアルゴリズムの開発が望まれることが議論された。</p>